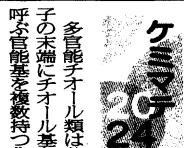


化学工業日報で当社の記事が掲載されました

2024年11月20日付の化学工業日報新聞において、樹脂添加剤や有機合成向けの新製品についての記事が掲載されました。

多官能チオール類をはじめ、トリアジンチオール類・ビスマレイミド類・カルボジイミド類について、特徴や用途についてご紹介しております。

2024年(令和6年)11月20日(水曜日)



ケミカル
24

多官能チオール類は分
子末端にチオール基を
持つ高機能基を持つ化

合物で、エボキシ樹脂や
紫外線(UV)硬化樹脂
の硬化剤などに使われ
る。チオール系硬化剤の
中ではエステルという方
法が、水や湿気に触れ

ると加水分解しやすい課
題がある。
川口化学の新製品「A
CTOCURE S-A
32」はチオエーテルとい
う分子構造を導入するこ
とで、高い温度や湿度に
対する耐久性が高まり、
柔軟性のある硬化物を得ら
れるのが特徴だ。高温多
湿や水中向け製品設計が
可能といった点が評価さ
れて、接着剤用途で採用が
始まっている。

加えて、新製品を配合
することで樹脂と鋼との
密着性が向上する。ジフ
ニルメタジンジンシア

の採用が始まり、トリアジンチオール類やビスマ
レイミド類、医薬品原料などの合成に使われ
る。多官能チオール類は接着剤用途で新製品
の採用が開始され、トリアジンチオール類やビス
マレイミド類、医薬品原料などの合成に使われ
る。カルボジイミド類は開発品を拡充して顧客開
拓を進める。ゴム製品などの事業で培った有機
合成技術を生かして製品群を拡充しながら用途
の幅野を広げる。

川口化学

有機化合物の提案強化 樹脂添加剤や新製品相次ぎ



樹脂添加剤や有機合成向けに製品群を拡充し、売り込みを強化する

SHは、分子構造中にチオール基と不飽和基を併せ持ち、それらを金属に接合する。表面処理する。樹脂は分子構造の中で、単純な塗布だけではなく、プライム法や電解液調製によって金属を処理することも可能で、そうした使い方も含めて提案していく。

トリアジンチオール類は分子構造中に含まれるアミン基と呼ばれる官能基によって、硬化物は屈折率が1.6以上に高められる。半導体封止材や鋼張り板向け絶縁樹脂光材料といった用途でも需要を見込んでいる。粗い化合物を効率よく合成分する「クリックケミストリー」の一つであるエーテル・チオール反応によって、新製品を配合することで樹脂と鋼との密着性が向上する。ジフニルメタジンジンシアも提案していく。

ハロゲン系樹脂・ゴムの架橋剤として実績のあるトリアジンチオール類は、金属表面に処理することで別の用途にも展開できる。例えば、同社が開発した新製品「ACTOCURE 32」はUVを透過しやすい分子構造で構成される。厚膜が求められる用途でUV硬化樹脂にも適用される。IPBMはUVを透過する新製品と同様にUV透過性が高く、低融点・低粘度でハンドリング性が高められる。「IPBM」はDSCで測定された「IPBM」よりも溶剤への可溶性を高めた。光硬化性や耐熱性が発現した。光硬化性や耐熱性の樹脂が求められる光造形3Dプリンターの造形用材料、炭素繊維強化プラスチック(CFRP)材料などの用途向けに開発された。

SHは、分子構造中にチオール基と不飽和基を併せ持ち、それらを金属に接合する。表面処理する。樹脂は分子構造の中で、単純な塗布だけではなく、プライム法や電解液調製によって金属を処理することも可能で、そうした使い方も含めて提案していく。

トリアジンチオール類は分子構造中に含まれるアミン基と呼ばれる官能基によって、硬化物は屈折率が1.6以上に高められる。半導体封止材や鋼張り板向け絶縁樹脂光材料といった用途でも需要を見込んでいる。粗い化合物を効率よく合成分する「クリックケミストリー」の一つであるエーテル・チオール反応によって、新製品を配合することで樹脂と鋼との密着性が向上する。ジフニルメタジンジンシアも提案していく。

ハロゲン系樹脂・ゴムの架橋剤として実績のあるトリアジンチオール類は、金属表面に処理することで別の用途にも展開できる。例えば、同社が開発した新製品「ACTOCURE 32」はUVを透過しやすい分子構造で構成される。厚膜が求められる用途でUV硬化樹脂にも適用される。IPBMはUVを透過する新製品と同様にUV透過性が高く、低融点・低粘度でハンドリング性が高められる。「IPBM」はDSCで測定された「IPBM」よりも溶剤への可溶性を高めた。光硬化性や耐熱性が発現した。光硬化性や耐熱性の樹脂が求められる光造形3Dプリンターの造形用材料、炭素繊維強化プラスチック(CFRP)材料などの用途向けに開発された。